

羽越水害から50年！ 荒川総合水防演習が開催

5月27日、村上市荒川緑新田地先の荒川右岸河川敷を会場に「語りつげ！羽越水害子に孫に」荒川総合水防演習」が開催されました。

これは、昭和42年8月28日に発生した「羽越水害」から50年を迎える今年、記念事業の一環として行われたもので、国土交通省をはじめ関係機関や消防団など総勢2500人が参加。羽越水害の継承と防災意識の高揚を図るとともに水防体制の強化を目的として実施されました。



演習は、実際の災害を想定して行われ、避難訓練や水防工法演習、応急復旧工、炊き出し訓練、ヘリコプターを使った水難者救助訓練が本番さながらで行われました。

村からも、消防団員が参加し、機敏に作業を行いながら災害時への士気を高めました。また、豪雨や地震体験コーナーも設置され、参加した関川小学校5年五十嵐希夢さん(上川口)は、「実際に起きたらと思うと怖いと感じた」と話していました。

歌とおどりの祭典

～ 笑楽会と地元の皆さんが出演～

6月17日、せきかわ笑楽会(川又政男会長・鮎谷)が、17回目となる歌とおどりの祭典を開催しました。会場となった村民会館大ホールは、大勢の観客であふれ、立ち見が出るほどの大盛況となりました。

村内外から集まった107組の出演者が、歌や踊りを披露し、会場からたくさんの拍手が送られていました。

また、特別ゲストとして、サウンドフィールド所属の三沢浩二さん(新発田市出身)が登場し2曲を披露すると、会場はプロの熱唱に釘付けとなりました。

せきかわ笑楽会会長で総合司会を務めた川又会長は、「年々、出演者が増えて盛り上がりを見せている。今年も幅広い年代が出演してくれて、みなさんに楽しんでもらえた」と盛会を喜んでいました。



若手官僚が小学校でキャリア教育

6月5日から5日間、平成29年度に入省した国家公務員の若手官僚が関川村を訪れました。

これは「初任行政研修」の一環で、地方自治体の実情を学んでもらおうと、村が受け入れているもので、今年で10年目を迎えました。

訪れたのは、文科省、厚労省、法務省に採用された3人の研修生。研修期間中は羽越水害の状況や村の観光業務などを体験しました。

6月8日は、児童たちの職業観を育て、夢を持ってもらおうと関川小6年生を対象にした特別授業に参加。授業では「法律を作って人を救う仕事をしたいと思った。自分の可能性をつぶさないように、何かやりたいことが見つかった時に後悔しないように勉強することは大切」と子どもたちにアドバイスを送りました。

桂澤睦貴さん(6年・田麦千刈)は「国家公務員にもいろいろな内容の仕事があることが分かった。」と感想を話していました。



上土沢竹灯籠と篠笛の調べ

～ 特別養護老人ホーム垂水の里 ～



6月16日、垂水の里の園庭で上土沢竹灯籠の会（岡田周一代表：上土沢）が1,100本の竹灯籠を設置しました。

これは、竹灯籠作りを始めて3年になる上土沢竹灯籠の会が、皆さんを喜ばせたいという思いから村内の福祉施設に開催を呼びかけたことで実現しました。また、さらにこの日は、篠笛奏者の田村優子さん（平内新）による篠笛演奏も行われ、近隣施設の利用者や地元住民など約80人が集まり、夕暮れ時の園庭に灯る竹灯籠のあかりと篠笛の音色に包まれながら、初夏のひとつときを過ごしました。

岡田代表は、「施設にご理解をいただき、利用者のみなさんに喜んでもらえて本当にうれしかった。いつか、1万本くらいの大規模でやって、もっと多くの人を笑顔にしたい」と話していました。

喫煙者のマナー向上を！

～ たばこ販売協同組合関川地区 ～

6月14日、喫煙マナーの向上を図ろうと、たばこの小売店などをつくる新潟県たばこ販売協同組合関川地区（佐藤ヒサエ代表：下関）が、下関地内や道の駅周辺で清掃活動を行いました。組合員である村内小売店の社員と村上市荒川地区から応援にかけつけた組合員の12人で路上に捨てられた吸い殻などのゴミを拾い集めました。

この活動は、上部団体の全国たばこ販売協同組合連合会が定めた「全国統一美化運動」で、毎年行っている社会貢献活動の一つです。

参加者が越後下関駅前の通り、ゆ～む周辺などを歩き、たばこの吸い殻や空き缶などを火ばさみで回収してまわりました。

参加者の佐藤代表は、「たばこのポイ捨てなどによるごみは目立たなくなっただけではいるが、ゼロになるよう喫煙マナーを守ってもらいたい」と話していました。



6月18日、第44回目を迎えた関川マラソンが開催され、今年も1,400人超のランナーが新緑の関川村で、健脚を競いました。

丸山大橋では、家族や友人の応援に訪れた人たちが、苦しい様子のランナーたちに「ファイト」、「がんばれ」などと声をかけていました。参加者は、沿道からの応援を背に、それぞれのペースでゴール地点のふれあいどくむをめざしました。



12 km コースに出場した新潟交通(株)マラソン部の志賀秀也さん（新潟市）は、「この日のためにTシャツを作って、20名で参加しました。15年ぶりのマラソンで、このアップダウンはきつかった。けど、景色がきれいで良かった。来年は練習して参加したい」と感想を話していました。

レース後には、村食生活改善推進員やボランティアの皆さんが作ったわらび汁が振るまわれ、参加したランナーは疲れた体を癒していました。

UP・DOWN 第44回 関川マラソン

豊かな水と緑の空間を駆け抜ける